

歌の力

細谷 建治

明治の児童文学者、巖谷小波に「メルヘン論争」と呼ばれているお伽噺に関わるやりとりがある。小波のお伽噺は無邪気だが消極的で世界が小さいという批判があった。小波は、雑誌『少年世界』の「明治廿九年六月」を境として変わったからみてくれと返答している。

おそらくいのは、その「境目」以後の作品に韻文が多用されていることだ。小波の作品は、もともと登場人物たちがおもしろおかしく失敗する「消極的諷刺」を旨とするものが多かった。しかし、その窮屈さから、小波自身が抜け出そうと考えていた。それを意識的に実行したのが、「明治廿九年六月」以後ということになる。

境目の作品を見てみよう。「雷の臍」（『少年世界』第二巻第十三号、一八九六年七月）は、雷神が子どもたちにへソをとられそうになる話だ。雷神が、ゴロゴロ、ピカピカ、おへそをさらっていくぞと出てくる。それを、わんぱく小僧たちが、逆に毘にかける。つかまえる。太鼓をとってしま

う。雷神は雲を霞と逃げていく。

小波お伽噺は「口演」を旨とするので、もともと地の文も調子がいい。しかし、この作品には意識的に韻文が用いられている。

とんまのとんまの雷神ヤイ！

お臍が欲しけりや一昨日来い！

ドンドコ、ドンドコ、

ドンドコドン！

子どもたちが逃げていく雷様をはやす歌だ。雷様は情けない歌を歌いながら、逃げていく。

さても恐いぞ腕白小僧！

臍をやるとて雷神釣つて、

臍はきれいで太鼓を取つた。